



「リベレーター」つまり自由解放者アメリカの虚像。奴隷制度、KKKによるリンチ、拝金主義、そしてユダヤ人が、ヨーロッパの町を爆撃により破壊しているメッセージが読みとれる。アメリカのイメージは人間と昆虫（脚が三対六本）のハイブリッドとして表現されている。中央左下にある「アメリカ合衆国は、破壊からヨーロッパ文化を救済に来るだろう」（オランダ語）*から、恐らくナチスドイツ親衛隊（SS）により1944年当時占領下にあった当地で配布されたと思われる。
WWII Propaganda: コロンビア・カレッジ（ミズーリ州）の歴史授業の資料に関連するページより
<http://www.ccis.edu/courses/HIST102mtmcinneshin1/WWIIprop.htm>

* De U.S.A. zullen de Europeesche Kultur van den ondergang redden.

許されない。では、そのような学問からどうして、良い／悪いという判断が含まれる害虫という概念が出てくるのか？ それは人間に対して危害（ハザード）を起こす潜在危険性（リスク）という観点から理解し、価値判断による偏見を「中和化」しているからである。この中和化のメカニズムを「南京虫」の事例で説明しよう。

やっかいなものはどこから来る？

夜間に吸血するときに出す唾液のために噛まれるとアレルギー反応が出てとても痒い。蚊に刺されたときにも痒いのだが、これらは唾液を出して血液の凝固を防ぐためだといわれている。おなじカメムシの間でもシャーガス病を媒介する吸血性サシガメ（五〇種類以上いる）にくらべて、南京虫の伝染病媒介リスクは少ない。問題はなぜこの名前に南京という地名が割り当てられているかである。もちろん中国起源の昆虫ではない。したがって客観的を旨とする科学者は決して南京虫とはよばない。どうもこれは「やっかいなものは中国（＝唐國）からくる」という和人の偏見に基づくものらしい。だからそ

押された烙印

全体主義や戦争というストレスフルな状況は、人間のあいだにある人種的偏見を、人間以外のものに喩えて、そのあいだの嫌悪感を増長させるだけでなく、統治者や軍隊はその体制や戦争を遂行するためにその喩えや偏見を積極的に利用すると、ジョン・ダワーは『容赦なき戦争』（平凡社）でいっている。そのときには、人間によって「害虫」の烙印を押された虫どもの不快なステレオタイプを動員することがとても便利になるのだ。その意味で、わたしは「害虫」という命名がいささか独善的であり、その文化的な誤用があまつさえ危険なものであることを、このコラムで指摘した次第なのである。



上：「二八」を払う儀礼をおこなう、モビとよばれる儀礼職能者（2013年9月8日）
下：煮炊きをおこなう囲炉裏。外からやってきた人間は、ここではざる火の粉にまつわる「二八」の影響を受けやすいのだという（2013年11月10日）

「二八」のしわざ
では、害虫でないとすると、わたしの身体を無残に蝕んだのは何だったのか。村人たちはそれを、「二八」のしわざだという。外からやってきた人間は、この土地の水になじむまで、雷や囲炉裏の火に関連する二八の影響を受けやすいのだそう。二八は大に小に悪さをおこなうが、人間は二八を見るのができない。いわば精霊のような存在であり、安全と健康を保つためには、生費で宥めてこれを遠ざけておかねばならないのである。
手持ちの軟膏薬も尽きてから、わたしも二八払いをおこなってもらった。なるほど、村に来て半年ほど過ぎるころには、どんなに怪しい布団にくるまって寝ても、さほどの症状は出なくなっていた。はたして害虫への免疫がついたのか、精霊を追い払うことに成功したのか、それはまだにわからない。

「害虫」という呼称の危険性について

池田 光穂

大阪大学
コミュニケーションデザイン・
センター教授

価値と実害

わたしは「医療人類学」という医学と人類学を架橋（ブリッジ）する学問を研究している。ブリッジするとは、医学を人類学的に解釈分析すると同時に、人類学もまた医学のまなざしのもとで反省的な精神を取り戻す営為である。したがってまず「害虫」をどのようにに医学がとらえるのかを考えてみよう。

害虫学は、さまざまな学問に支えられている。ざっとみても、農業昆虫学という中核研究のほかに、医学領域においては医学生態学、医学動物学、医学昆虫学、毒物学、寄生虫学などが関連する。これらの諸領域の基礎学問は生物学である。生物学は生命現象を客体化して研究する。客体化とは、これが良い／悪いという価値判断を差し控えて中立的な観点から実験、分析することである。もちろん「捏造」も